

特集
問

い直そう、保育の中のあたりまえのこと10

「規範意識」って何だろっ？



座談会

ともさだけいこ なかむらまきこ おおもりようこ
友定啓子氏・中村万紀子氏・大森洋子氏

友定氏は山口大学教育学部教授。中村氏は同学部附属幼稚園の副園長、大森氏は同幼稚園教諭。共著に『幼稚園で育つ—自由保育のおくりもの』（ミネルヴァ書房）、『保護者サポートシステム—もう一つの子育て支援』（フレーベル館）がある。

今回のテーマは「規範意識」。その「芽生え」の部分で幼児期にはぐくむことの大切さが、最近の幼稚園教育要領・保育所保育指針に盛り込まれていきます。ちよつと硬いテーマですが、現場の具体的な子どもの姿から、いろいろと楽しくおしゃべりしてきました。山口大学教育学部附属幼稚園を訪問させていただいたのはとても寒い雪の日でしたが、玄関に入った途端、ストーブの暖かさだけでない、居心地のよさに癒されました。友定先生と幼稚園とのしつかりした絆が自然と伝わってきた座談会でした。

「私はこう考える」の宮里先生のお話は、まさに「あたりまえ」を問われるものです。「規範意識」について頭を整理したい方、内藤先生の解説も必読です！

（編集委員 宮里暁美・浜口順子）

規範意識というテーマを聞いて

宮里 二〇〇九年に国公幼(全国国立幼稚園長会)が保護者や教員を対象に「子どものしつけ等に関する実態と意識についての調査」をしているんだけれど、その中で、公園のベンチに靴のまま上がるとか、ものを食べながら道を歩くとか、居酒屋に夜遅く子どもと入るとか、こういう行動が気になるかどうかという質問がありました。気になるかどうか、というそのあたりに、その人の規範意識の根っこがあるのかなと考えさせられたことを覚えています。

今、社会全体の規範意識が弱くなっていると言われていて、確かにそうかもしれないと感じることも多い。だから幼稚園で厳しく指導するという意味ではなくて、だからこそ何が幼児期に必要なとか、あるいはお母さんたちに何を伝えるのかっていうことを、本当によく考えたいと思っています。

大森 お弁当やおやつを食べる時に、「待っててね」とか「一緒に食べようね」と言いますが、もら

った瞬間に食べる子どもとかがいますよね。本人にとっては何の悪気もなく、こちらは、この子は家では多分一人で食べていて、待つとかいうことがないんだなと思ったります。それで、一緒に食べるのがこの園の中では決まりだよ、みたいなことを生活の中で知らせていくということがきつと大事なんだろうな。でもそれがイコール規範意識ということは思ったことはなかったです。

園生活の入リ口で

友定 ルールとか規範とか道徳とかっていうのは、私はあまり触れたくない領域なんです。何だか自分のことと思うと人には言えないわよみたいなところが一つある(笑)。それからもう一つ、この時代になつて基本的に個人個人の自由が、最大の価値。人の指図は受けないで自分の責任でやりたいことをやるっていうのがライフスタ



▲友定啓子氏

イルとしても市民権を得ちゃっていると思うんですよね。それが基本にあるから、家庭も地域もそういうところがある。それに幼児っていうのは家の中では配慮されて、かなり自由にやっていると認められる、そういう存在じゃないですか。

でも幼稚園に来たら、ほかの子とは対等で、向こうもこっちに向かってくるし、こっちも向かっていく。園生活というのは、どうほかの子と折り合って共生してやっていくかというのを個別にたくさん体験して、そういう感覚を養っていく場所だと思うんですよね。幼稚園での規範っていうか文化的な価値を体験していく。

浜口 自由でいたい反面、何でも自由にやっていいよっていうのは子どもにとって実は心地よくないという面もある。入園の時、お家とは違う幼稚園らしい生活というものを何となく楽しみにやって来る。でも現実はいくらにも今までの生活と違うことに気が付き、反抗するというよりは、とにかく訳がわからず、どうしたらいいか戸惑うという感じではないか。

中村 うちの幼稚園の庭に汽車があつて、その汽車

で遊ぶことを楽しみに毎朝登園する三歳の子どもがいて、満足したらお家に帰るっていうところからその子の幼稚園生活がスタートしていた。汽車で遊ぶために来るの。満足したら生活の拠点である家に帰ろうとする。その子にとっては当然の気持ち。降園時間まで園で過ごさなきゃいけないことになり、泣くこともあるけれど、保育者といろいろやりとりしながら、汽車以外にも楽しいことや、うれしいことがあることに気が付いてくる。時間とか生活の流れも、そうやって生活しながらだんだんこういうものだったのかなと理解できていくのだと思う。一年が終わるころになると自分たちで「お帰りですよ」と呼び掛け合っている。面白いなって思ってたんです。
友定 子どもは、例えば靴箱に自分の靴を入れる、かばんをここに置くとかかっていうそういう朝の一連の行動を自分のものにした時に、気持ち安定してくるっていうことがありますよね。しかも同時に非常に合理的じゃないですか。そこに靴を入れなきゃ

どこかに行っちゃってすぐく混乱するわけでしょ。

中村 山口市では、少人数園同士が地域で二、三園交流を実施しています。違う園でも子どもたちが安心して過ごせるようにと、先生方が話し合って、訪問先の園でも自分のスモックなど掛けられるように個別の名前シールを貼って場所を作ってあげるところから始めたそうです。いいスタートが切れ、和やかに交流も進んでいったという感想を思い出しました。自分の物を置く場所が保障されているっていうことが生活の拠点になるのね。

宮里 時々頑ななにかばんを置かない子とかいるじゃないですか。あれはまだ幼稚園を信用していません、ここに置いてねって言われても、もしかしたら本当は不安なのかもしれない。身から離れたら二度と……(笑)。そんな時にはどうしても置かせるのではなくて、じゃあ安心するまでは背負っていていいよっていうようにしていると、そのうちに置いていくようになっていく。

お帰りの時間を受け入れる

大森 例えば、お帰りの時間には集まってほしいですけれども、なかなか集まらない子どももいます。こちらは「今はね、集まるんだよ」ってことは言い続ける。言い続けながらも、でももう少し待たないと、とか、まだ無理だなどか思って、ほかの子には「待つてあげてね」などと言いながら、全体としては方向付けはしていくじゃないですか。そうするとたいいていの子どもには、今は帰るんだから集まらなくちゃいけないんだなということが見えてくる。はじめは与えられたものかもしれないけれど、だんだん自分の中に作られていくってことが規範意識の芽生えみたいなものじゃないかなって思います。

宮里 いくら言っても集まって来ない子のことを、そのことだけで評価してしまつたら、いけないんだというような声が出てきてしまうかもしれない。でも、「もうちょっと遊びたいんだって」とその子の状況をみんなに伝えたり、「待つてるよ」とこちら側の

気持ちはその子に伝えていく。約束事は変えてない
んだけれども、人には納得するまでにはいろいろ時
間がかかるとか、そういうことぐるみでその子ども
がわかるってことを大事にしたい。

友定 先生のペースタイプっていうか、先生が
どういうふうにその子を見ているかっていうのを子
どもは受けとめているんですね。大人の子どもに
対するまなざし。

幼児期はルールといっても、感覚とか感情とかに
とても引きずられるでしょう。幼児の場合、ルール
とか規範の納得の仕方っていうのがね、個別具体的
なものを通してしかできないんじゃないかと思う。
だから、その物は平等に使いましょとか、代わり
ばんこにしましよとか、手続きルールとかを先に
持つていってしまうと、自らルールに縛られた子ど
もみたいになって。具体的なこと全然考えずに、友
達に「片付けの時間よ、遊びやめなさい」とか言う
人いるよね。

大森 そういう子は「片付けだよ」って言って、人

が遊んでいる物を急に取り上げ
てしまったり、たたいたりとか
するんですね。形だけ入って
いて、自分にとっての片付けと
いう意味がわかっていない。相
手がまだ見えてないから、自分
の考えを相手に押し付けたりする。でも、相手が見
えてくると、どうも今無理矢理要求するのは違うら
しいみたいなのが、形じゃなくて自分の中に入っ
ていく。相手が友達として認識されたことによつて
何か入ってくるものがあるなって思いますね。

遊びの中で

大森 この間、三人の女の子がブランコで二人乗り
していたんですね。大きな縄ブランコなので、私が
押して、はじめは「そろそろ代わろうか」と促すと、
「うんそうする」とか「じゃあAちゃんとBちゃん
ね」と言いながら乗っていましたが、そのうち、自
分たちで、「そろそろ、まだ?」「うん代わろうね」



▲大森洋子氏

って、自然に代わり合ってる。どうしてこんなことが
ができるのかなって考えたら、そこにはやっぱり楽
しきがあるんじゃないかと思う。代わったら楽しい、
私も楽しいけれど友達も楽しいみたいな実感。

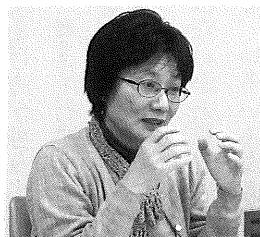
友定 遊びの中でも、鬼ごっことかよくルールをい
ろいろ変えてやっているよね。バリアがあるとか十
秒ルールがどうやらとか。

大森 四歳の時は先生が鬼をずっとやる時期がある
けれども、その時期ってやっぱり必要だと思います。
追いかけることが楽しいのは追いかける人がい
るからだってことがわかるから、今度は自分も追
かけてみようかなと思うんだろうし。鬼になりたく
ないっていう子がいると、四歳も後半になってく
ると、この子は鬼が嫌なんだよみたいなことを子ど
もが言う。鬼になったら交代するっていうことはわか
っているけれども、この子はまだ難しいからいいよ
っていうこともひっくるめてのルールというか。
宮里 遊びの中では、小さい妹とか弟がついて来た
らその子ルールにしちゃうっていうか、緩やかにし

てあげるとかいうのがありますね。

浜口 子ども特有のルールというか、大ゲンカして
いたと思ったら、いつの間にか笑い合って終わって
いるみたいな、理屈が通らない解決ってというのが
あって、感心してしまうのですが。

中村 もしかしたら、さんざん言い合う中で何かの
拍子に思わず笑ったら相手も
笑って、もうよしにしようみ
たいなことがあるのかも。言
うだけ言ったから、そのきつ
かけを待っていることってあ
りますね。



▲中村万紀子氏

大人の姿勢が問われている

友定 共同体的な感じがあると、徹底的に相手を破
壊するまでやったら自分も破壊されるんだからそこ
はすっと回避しようという知恵はね、絶対出てくる
と思うのね。剥き出しでやったらね、遊びが面白く
なくなるといえるのはわかるし、育ちの中で相手が大

ういう人なのかを互いにわかり合った時に、杓子定規のルールの展開ではいかない、この子はたつぷりやらせてあげようとか、自分はちょっと譲ろうとか、対等な人間関係だからってお互いに対等にやり合ってたらいつまでたつたつて決着つかないでしょ。

今のね、さんざんやり合った時にね、笑って面白いこと言ってずらして終わるっていうのは一つの知恵だし、自分がここは譲ろうとか、心の強い人が我慢できるとかね、一つの方向性だと思っただけで、そういうふうにして子どもが大人になっていくことを、ちよつとプッシュするとかね、そういうことも幼稚園の具体的なトラブルの中では伝えることができるよね。学校で外側からこういう規範のつとつてみんなで行動しなさいみたいな形で出すとは違う育て方だと思っただよ。

中村 学校ではもうあたりまえのことで済まされ、教師が一つひとつ言わないですが、保育者は一つひとつに、「よく我慢できたね」「強かったね」と認める。幼児期はまだまだ大人が価値付けたり、見てあ

げたりする部分が大きいと思います。規範意識っていうと堅いイメージがするんだけど、自分が認められたとか、大事にされているとかが根底にあつて、だから友達も好きになれるし、仲間になつていくのだと思う。その部分を置いて、形やルールから入ると、ぎすぎすする。だからやっぱり大人の姿勢みたいなことが問われていると思う。子どもというよりは、大人の見方、待つてあげ方が独りよがりであいまいなんだろうと思う。考えて行動できるようになるまでは一筋縄ではいかない、個人個人で違うんだつていうところを、ていねいに理解した対応がもつと認められていいのではないかと思う。

だからこそ園生活を送る中で、いろいろな人がいることで実は成長しているという気付きをしてほしいな。「みんなで育ち合う」本園の精神です。みんなで育てみんなで育つことがどれだけ子どもにとつて親にとつて保育者にとつて、大事かということ。

友定 そうだよな。人信じてもいいよねとかいうところとかね。

大森 大人がどうあるかという時に、お掃除とか片付けして、「きれいになったね、ありがとう」とか「気持ちいいね」「うれしい」とか、自分の気持ちを言葉で表したり、動作や動きで表したりすることってすごく大事だなんて思う。

それから、もう一つ、その子にとってわかりやすいように説明していくことはやっぱりすごく大事な仕事だなんて思っています。なぜそうするのか子どもたちにはわからないのだから、それを、わかりやすい、子どもの思考に合わせた形で、今こうだからこうしているんだよと言ってあげるの、一つ一つの大事な役割なんだろうなって思います。

友定 専門性だよな。

大森 そうですね。物が散らかってて、自分がそれをもたいで通るようなことしたら、物を大事にはできないし、物への愛着がないとやっぱり片付けもしないだろうしなって思うと、自分自身のあり方が問われているなって思います。物にも人にも愛情を持っていていうことが、生活の規範みたいなこ

とにつながるんだろうなと。

自分という準拠枠を求めて

友定 結局、人と共生するためのものなんだよね、ルールって。

大森 そうですね。でも、規範意識っていうのが本当に私わからない。一緒に生活する上で必要なことを身につけていくことって言ったら考えやすい気はするんだけど、規範意識って言われた途端に難しいぞって思ってしまう。

浜口 「道徳性の芽生え」のほうは幼児教育の中で比較的親しみやすい言葉ですが、最近、「規範意識」が入ってきた。規範って、私の中では、属している社会で共通に守るべきルールとして形式的に示されたもの、明文化されたもので、規範意識っていうのは、そういうものの中で生きることっていうことの意味を一人ひとり感じていくっていうことかなって思ってる。

友定 今日はいあんまり言わなかったけど、ルールで

もね、人を傷つけてはいけなとか、その部分も大きなテーマだよ、幼児教育の。殴ったり蹴ったり、ひどいこと言っはいけないとかね。そういうものの最たるものが法律でしょ。はっきり明文化して。傷つけてはいけない、傷つけたら制裁を加えるぞっていう大人社会。幼児の場合はそれはないわけだけどね。

大森 先程の帰りに集まらないことについてですけど、みんな待つてあげましようと待てるようになることが規範意識だとは私は思っていなくて、待つこととで他者を意識しながら自分も意識して、集まらない友達もいるけれど自分はやっぱり集まろうっと思っるのが規範意識だと思って話をしました。待つてあげる自分を反映しながら、自分は集まろうっと思っ。



宮里 自分なんだよね。

大森 自分はっっていうのができ
ていくことかなあと。

友定 自分の準拠枠みたいなものだよ。

宮里 他律的なものではないように規範意識を育てたいなと思っんです。でもそんなことあり得ないですか？ 誰かに注意されて守っっているっっていうのは他律？

友定 それは法律家の基本的な役割でしょう。悪いことしたら罰するぞっっていうのもあるけれども、罰せられちゃまずいから、やらないでおこうっっていう効果もあるので。他律的な部分はあると思っ。

宮里 でもその時にそのことが大事だとわかるとか、そういうふうにしたほうがいいな、そうやって人と一緒に気持ちよく暮らせたほうが楽しいな、気持ちいいなと思って守るっっていうふうには、特に幼児期ではしたいっと思っわけですよ。

友達と平等であるという感覚

浜口 幼児期の道徳性は、人に褒められる、認めてくれるからっっていうのから始まって、だんだんと自



▲宮里暁美氏・浜口順子氏

律的なものになっていくけれど、十分理解できないルールでも、友達もみんな平等に同じ拘束を受けるというところで甘んじる面がある。平等は時にしんどいものでもあって。だから自分だけじゃなくて、隣の子もみんな同じこと言われて守ろうとしていて、っていうことで、そこにフェアな感じはあるんじゃないかな。

友定 ボール遊びとかりレーで、こつちが何人あつちが何人と数が違ったらフェアじゃないよねって、そういう思考は五歳くらいだよ。三歳はそんなフェアはいから自分がよければいい、言い過ぎだけど、自分に不都合がなければよしだよ。

でもよくほら、お帰りの行列の時に必ず一番でなきやダメみたいな人いるじゃないですか。ああいうのは何が育ってないの？

大森 一番がいいという声が多くなったところに、順番が一番になるようにしようねとかよくやるんですけど、四歳の十月か十一月くらいだと、子どもたちがだいたい受け入れてくれるんです。

でも今年十一月くらいに子どもたちに提案したら、「私はまだ一度も一番になつたことがない」「私もなつたことがない」って結構たくさんの子どもが言つて、順番が受け入れられなかつた。どうしてこうなのかと考えた時に、必ず自分にも順番が来るよつていう保障みたいなものが生活の中でされていないのかなと。片付けでもそうだと思うけど、明日もここに置いておいてあげるからつて言うのと納得することつてあるじゃないですか。明日もあるとか、必ず自分の番は来るといふような安心感や保障みたいなものがないと不安だつたりするのかなつて思いました。

浜口 私たちの頭の中ではつい計算的に、五つものを五人で分けるのが一番公平みたいに思うけれど、三歳の子がね、フェアがまだよくわかんないつていても、すごく自分を大切にされているつていうふうに思えば、ほかの子が大切にされているのも認められるつていうフェア感の源みたいなものはあるんじゃないか。その時は一人ずつ、1、1、1、なん



だけど、自分が認められているのが前提で、初めてほかの1も意味を持ち始めるような感じ。そこはあいまいなのに、五人で5分の1の扱いされたらとてもやってられないっていうような感じが三歳で、五歳くらいになると、ある程度5分の1でも自分を支えられたり、でも時々はちゃんと1で見えてほしいとか、そういう両面が出てくるのかなって。

大森 お帰りの時、お母さんが一番だね、とかって言うけど、そこに価値を置かないでって。

友定 思うよね。

浜口 大人は「一番がいい」っていう規範を持っていて、いる人が結構多い。

中村 かけっこなどで一生懸命走ったねっていう意味で、どの子にも「一番」って声掛けすることあります。私の中では一生懸命頑張るっていうその結果。自分の中で一番という意味で使っています。

(二〇一三年一月二十七日)

―座談を終えて―

いろいろ大事なことを聞いたのですが、ルールを理解して自分を守ろうとするという第一段階の規範意識に加えて、具体的な人や状況に即して、ルールをしなやかに受けとめていくことの重要性は全員で共感した点です。それが子どもの他者や自分へのまなざしを育てていくことにもつながると考えました。

ルールは他律的な性格を持つているけれども、それによって子どもが安定する側面もあり、保育者によって子ども一人ひとりの気持ちや認められ価値付けられることが、子どもの規範意識につながっていくことが話されました。また、保育者の専門性として、ルールについて幼児の思考や感覚でわかるように説明する力が重要であることも再確認しました。

(友定)

